

# チュンダの施食

— *Paṭhamasambodhi* 第14章  
Parinibbānakathā 訳注研究(3) —

岩井昌悟

## はじめに

本稿では George Cœdès の校訂になる *Paṭhamasambodhi* の第14章 Parinibbānakathā の訳注研究の(3)として、校訂本の241頁12行目から245頁9行目までを訳出する<sup>1</sup>。

捨寿行を行った釈尊がヴェーサーリーを去り、バンダ村、ハッティ村、アンバ村、ジャンプ村、ボーガナガラを経てパーヴァーに至り、そこでチュンダのスーカラマツダヴァの施食を食べて体調を崩し、脱水症状からか、阿難に渴きをうったえる。阿難はその川は今しがた車が通り過ぎて水が濁っているので、もう少し先のクックタ川までがまんしてもらおうとするが、釈尊は3度同じことを言い、阿難はしかたなくその水が濁っているはずの川に水を汲みに行く。ところが阿難が来てみるとその川は水が澄んでいた。阿難は水を汲んで戻り釈尊に水を差し上げる。

## 凡例

1. *The Paṭhamasambodhi*, ed by George Cœdès, edition prepared by Jacqueline Filliozat, PTS, 2003を底本とし、異読の参照は同校定本の脚注のものに限る。
2. 異読の採用は以下の原則に則る。
  - ① 固有名詞については、異読の中に、より一般的な、または正しい綴りが得られる場合は訂正し、脚注に底本に挙がる形を示す。異読に

---

<sup>1</sup> *The Paṭhamasambodhi*, ed. by George Cœdès, edition prepared by Jacqueline Filliozat, PTS, Oxford, 2003, pp. 236-241.

なければそのままとし、脚注に一般的な、または正しい綴りを\*を付して示す。

- ②固有名詞以外については、異読の支持が得られる場合は、訂正して脚注にその旨を明記して底本の形を示す。異読の支持なく emendation を施す場合、本文に\*を付して訂正し、脚注において底本中の当該の語に下線を付す。
3. 内容に関する注釈は和文に脚注を付す。
4. [ ] 内の数字は校訂本の頁の数字を示す。
5. 改行は適宜、任意に行った。
6. (,) (.) などの句読点を適宜補った。補った場合は ( ) に入れた。(:)ではじまるセリフについては“ ”を補ってより明確を期した。‘ ’は考えた内容、または仮定されたセリフを示す。
7. 本稿注に言及する Dīghanikāya (DN)、Majjhimanikāya (MN)、Saṃyuttanikāya (SN)、Aṅguttaranikāya (AN) その他のパーリ聖典やアッタカターの引用は Chaṭṭha Saṅgāyana Tipitaka Version 4.0 (CST4) (<http://www.tipitaka.org/cst4>からダウンロード可) のテキストに基づいている。ただし頁は PTS の該当箇所 の頁で示す。

#### XIV Parinibbānakathā (承前)

evaṃ bhagavā attano āyusaṃkhāraṃ osajjitvā ānandaṃ āmantesi: “āyāṃ' ānanda yena bhaṇḍagāmo ten' upasaṅkamissāmā” ti. therō: “sādhū bhante” ti. atha kho bhagavā mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ yena bhaṇḍagāmo tena gantvā tattha<sup>2</sup> yathābhirantaṃ viharitvā bhaṇḍagāmanussānaṃ dhammaṃ desetvā \*saggamokkhamagge<sup>3</sup> patiṭṭhapesi<sup>4</sup>.

このように世尊は自身の寿行を捨てて、阿難に「阿難よ、バンドラ村に

<sup>2</sup> tattha. 底本は tathā. 異読 (CI) に従う。

<sup>3</sup> \*saggamokkhamagge. 底本は sattamokkhamagge. saggamokkhamagge はすでに底本 p.235 にあらわれている。

<sup>4</sup> patiṭṭhapesi. 底本は patiṭṭhapetvā, とする。異読 (H) に従う。

赴こう」と呼びかけた。〔阿難〕長老は「尊師よ、かしこまりました」と〔答えた〕。それから世尊は大勢の比丘僧伽とともにバンダ村に行って、そこに随意留まり、バンダ村の人々に法を説き、〔彼らを〕昇天の道と解脱の道に確立させた。

tato bhagavā ānandaṃ etad avoca: “āyām' ānanda yena hatthigāmo yena ambagāmo yena jambūgāmo<sup>5</sup> yena bhoganagaraṃ ten' upasaṅkamissāmā” ti. “sādhu bhante” ti kho āyasmā ānando bhagavato paccassosi.

それから世尊は阿難に「阿難よ、ハッティ村に…(中略)…アンバ村に…(中略)…ジャンブー村<sup>6</sup>に…(中略)…ボーガナガラに赴こう」と言った。「かしこまりました」と〔言って〕阿難長老は世尊に同意した。

atha kho bhagavā mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ yena bhoganagaraṃ ten' upagantvā<sup>7</sup> bhoganagare viharati. bhoganagaravāsināṃ dhammaṃ desetvā tattha yathābhirantaṃ [242] viharitvā, tato bhagavā āyasmantaṃ ānandaṃ āmantesi: “āyām' ānanda yena pāvānagaraṃ ten' upasaṅkamissāmā” ti. “evaṃ bhante” ti kho āyasmā ānando bhagavato paccassosi.

それから世尊は大勢の比丘サンガとともにボーガナガラに赴き、ボーガナガラに住した。ボーガナガラの住民たちに法を説き、そこに随意留まり、それから世尊は阿難長老に「阿難よ、パーヴァーナガラに赴こう」と呼びかけた。「かしこまりました」と阿難長老は世尊に同意した。

atha kho bhagavā mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ yena \*pāvānagaraṃ<sup>8</sup> tena gantvā cundassa kammāraputtassa ambavane viharati. tadā cundo kammāraputto bhagavato āgamanapavuttiṃ sutvā dīpadhūpagandhamālādīni gahetvā āgantvā bhagavantaṃ pūjetvā vanditvā ekamantaṃ nisīdi. tato bhagavā taṃ dhammiyā kathāya sandassesi samādapesi samuttejesi sampahaṃsesi.

<sup>5</sup> \*jambūgāmo.

<sup>6</sup> 「ジャンブー村」(janbūgāma) は一般的には「ジャンブ村」(jambūgāma) である。

<sup>7</sup> ten' upagantvā. 底本は patvā tattha. 異読 (C) に従う。

<sup>8</sup> \*pāvānagaraṃ. 底本はここでは pāvā. 異読 (C<sub>1</sub> H) は pāvāraṃ. この地名について pāvā と pāvānagara で表記が一定していない。今は \*pāvānagara に統一する。

それから世尊は大勢の比丘サンガとともにパーヴァーナガラに行って、鍛冶工師子チュンダのアンバ林に住した。その時、チュンダ鍛冶工師子は世尊の到着を聞いて、灯明・煙・香・華蔓などをもってやってきて、世尊を供養し、敬礼し、一方に坐った。それから世尊は彼を説法によって、教示し、訓戒し、励まし、喜ばせた。

desanāpariyosāne cundo<sup>9</sup> kammāraputto bhagavantam sabhikkhusaṃgham nimantesi<sup>10</sup>. bhagavā tassa anukampāya \*tuṇhībhāvena<sup>11</sup> adhivāsesi. tato cundo bhagavato adhivāsanaṃ viditvā uṭṭhāyāsanaṃ bhagavantam vanditvā sakageham gantvā tassā rattiyā accayena sakanivesane paṇītam khādaniyam<sup>12</sup> bhojaniyam paṭisaṃharitvā tato ekaṃ jeṭṭha\*sūkaram<sup>13</sup> gāhāpetvā sādhipakkaṃ paccāpesi. tadā dasasahassacakkavāḷadevatāyo āgantvā tattha ojaṃ pakkhipimsu. atha cundo bhagavato kālam ārocesi<sup>14</sup>: “kālo bhante niṭṭhitaṃ bhattan” ti.

説示の終わりに、チュンダ鍛冶工師子は世尊を比丘サンガとともに〔食事〕に招いた。世尊は彼に対する憐憫の情によって沈黙によって承諾した。それからチュンダは世尊の承諾を知って座より立ち、世尊に敬礼してから自分の家に行き、その夜が過ぎると、自身の家において、極上の硬食・軟食を捨てて<sup>15</sup>、それから一匹の最上の豚を得て、よく煮させた<sup>16</sup>。その時、一万輪囷山世界の神々がやってきて、そこに滋養素を投げ入れた。それからチュンダは世尊に「尊師よ、お時間です。お食事のご用意ができました」と〔人を遣って〕時を告げさせた。

<sup>9</sup> desanāpariyosāne cundo. 底本は desanāpariyosāne atha kho cundo. 異読 (H) によって atha を、異読 (C<sub>1</sub> H P<sub>0</sub>) によって kho を削除する。

<sup>10</sup> nimantesi. 底本は nimantetvā. 異読 (C) に従う。

<sup>11</sup> \*tuṇhībhāvena. 底本は tuṇhībhāvena. 異読の支持はない。

<sup>12</sup> khādaniyam. 底本は khādaniyam. 異読 (H P<sub>0</sub>) に従う。

<sup>13</sup> -\*sūkaram. 底本は sukaram. 異読の支持はない。

<sup>14</sup> ārocesi. 底本は ārocetvā. 異読 (C) に従う。

<sup>15</sup> スーカラマツダヴァ以外の硬食・軟食を捨ててしまうのは後の文脈（釈尊以外の諸比丘には硬食・軟食がふるまわれる）から言っても不自然である。paṭisaṃharitvā 「捨てて」を \*paṭiyādāpetvā 「用意して」と訂正すべきかもしれない。

<sup>16</sup> スーカラマツダヴァが豚肉料理であることが明記されている。ブツダゴースは下記のように述べる (DN 註 vol. II, p. 568)。

**sūkaramaddavan** ti nātitaruṇassa nātijiṇṇassa ekajetṭhakasūkarassa pavattamaṃsaṃ. taṃ kira mudu c' eva siniddhañ ca hoti, taṃ paṭiyādāpetvā sādhukaṃ pacāpetvā ti attho.

eke bhaṇanti – “sūkaramaddavan ti pana mudu-odanassa pañcagorasayūsapācan avidhānassa nām' etaṃ, yathā gavapānaṃ nāma pākanāman” ti.

keci bhaṇanti – “sūkaramaddavaṃ nāma rasāyanavidhi, taṃ pana rasāyanasatthe āgacchati, taṃ cundenā – ‘bhagavato parinibbānaṃ na bhaveyyā’ ti rasāyanaṃ paṭiyattan” ti.

tattha pana dvisahassadīpaparivāresu catūsu mahādīpesu devatā ojaṃ pakkhipiṃsu.

①スーカラマツダヴァとは若すぎない、老いすぎてもいない、ある上等の豚の死肉である。それは柔らかく、脂がのっているという。それを用意させて、よく煮させてという意である。

②あるものはスーカラマツダヴァとは五味(乳・酪・生酥・熟酥・醍醐)を用いた汁物類の柔らかいご飯の名前であるという。「牛の飲み物」が猷立名であるのと同じ。

③またあるものは、スーカラマツダヴァとは霊薬の類であるという。それは霊薬に関する書物に伝えられ、チュンダが「世尊の般涅槃がないように」と考えてその霊薬を用意した。

そこには(スーカラマツダヴァには上記の何れの解釈でも)二千の鳥々に囲まれる四大洲じゅうの神々が滋養素を注ぎ込んだ。

ダンマパーラは次のように述べる (Udāna 註 p. 399)。

**sūkaramaddavan** ti sūkarassa mudusiniddhaṃ pavattamaṃsan” ti mahā-atṭhakathāyaṃ vuttaṃ.

keci pana “sūkaramaddavan ti na sūkaramaṃsaṃ, sūkarehi madditavaṃsakaḷīro” ti vadanti.

aññe “sūkarehi madditappadese jātaṃ ahichattakan” ti.

apare pana “sūkaramaddavaṃ nāma ekaṃ rasāyanan” ti bhaṇiṃsu. tañ hi cundo kammāraputto “ajja bhagavā parinibbāyissati” ti sutvā “appeva nāma naṃ paribhuñjitvā cirataraṃ tiṭṭheyyā” ti satthu cirajīvitukamyatāya adāsī ti vadanti.

**tena maṃ parivīsā** ti tena mamaṃ bhojehi. kasmā bhagavā evam āha? parānuddayatāya. tañ ca kāraṇaṃ pāḷiyaṃ vuttam eva. tena abhihaṭabhikkhāya paresaṃ aparibhogārahato ca tathā vattuṃ vaṭṭatī ti dassitaṃ hoti. tasmīṃ kira sūkaramaddave dvisahassadīpaparivāresu catūsu mahādīpesu devatā ojaṃ pakkhipiṃsu. tasmā taṃ añño koci sammā jīrāpetuṃ na sakkoti, tam atthaṃ

atha kho bhagavā bhikkhusaṃghaparivutto pattacīvaram ādāya yena cundassa nivesanaṃ tenā gantvā paññattāsane nisīditvā cundaṃ etad avoca: “<sup>17</sup>cunda yan te \*sūkaramaddavaṃ<sup>18</sup> paṭiyattaṃ tena maṃ eva [243] parivisa(.) yaṃ avasiṭṭhaṃ taṃ sobbhe nikkhaṇāhi(.) nāhan taṃ cunda samanupassāmi sadevake loke samārake

pakāsento satthā parūpavādamocanattaṃ “nāhaṃ taṃ, cunda, passāmi” ti-  
ādinā sīhanādaṃ nadi. ye hi pare upavadeyyuṃ “attanā paribhuttāvasesaṃ n’  
eva bhikkhūnaṃ, na aññesaṃ manussaṇaṃ adāsi, āvāte nikkhaṇāpetvā vināsesi” ti,  
“tesaṃ vacanokāso mā hotū” ti parūpavādamocanattaṃ sīhanādaṃ nadi.

①スーカラマツダヴァとは、豚の柔らかくて脂ののった死肉であると『大註』に説かれている。

②あるものはスーカラマツダヴァとは、豚肉ではなく、豚が踏み筈であると言う。

③あるものは豚が踏み場所に生えている茸（トリュフ？）[であるという]。

④しかしまたスーカラマツダヴァとはある霊薬であるというものもある。なぜならチュンダ鍛冶工師子が「今日、世尊は般涅槃に入られるであろう」と聞いて、「多分、これを食されれば、もっと長く〔世に〕とどまられるだろう」と〔考えて〕、師の長寿を願って、〔スーカラマツダヴァを〕差し上げたのだと彼らは言う。

「それ（スーカラマツダヴァ）を私に〔だけ〕給仕しなさい」とは、それを私に〔だけ〕食べさせなさいの意である。どうして世尊はこのように言ったのか。他者への思いやりからである。そしてその根拠はウダーナ聖典本文に説かれていることのみであるが、それは〔乞食で得た施食ではなく〕運ばれた施食であるから、それとまた、〔如来〕以外の他者が食べるに相応しくないからであると言えることを示している。そのスーカラマツダヴァには二千の鳥々に囲まれる四大洲じゅうの神々が滋養素を注ぎ込んだという。それゆえそれを正しく消化できる者が〔如来の〕他には誰もいないということを明かしながら、師は他からの非難を回避するために「チュンダよ、〔スーカラマツダヴァを消化できる者を如来の他に〕私は見ない云々」と獅子吼した。なぜなら他の者たちは「自分が食べた残り物を諸比丘にも他の人々にも与えず、穴を掘らせて埋めさせた」と非難するかもしれず、彼らにそのように言う機会を与えないようにと〔考えて〕他からの非難を回避するために獅子吼した。

<sup>17</sup> 以下底本が cunda yaṃ sukaramaddavaṃ tayā paṭiyattaṃ maṃ parivīsāhi yaṃ avasiṭṭhaṃ sobbhe nikkhaṇāhi nāhan taṃ passāmi sadevako loko taṃ paribhūjītvā sammāpariñāmaṃ gaccheyya aññatra tathāgatassa とするところを異読 (C) に従って訂正した。

<sup>18</sup> \*sūkaramaddavaṃ. 底本も異読 (C) も sukaramaddavaṃ とし異読の支持はないが訂正する。

sabrahmake sassa[maṇa<sup>19</sup>]brāhmaṇiyā pajāya(,) yassa taṃ paribhuttaṃ sammā pariṇāmaṃ gaccheyya aññatra tathāgatassa(.) yaṃ kho pan'<sup>20</sup> aññaṃ<sup>21</sup> khādaniyaṃ bhojaniyaṃ paṭiyattaṃ tena<sup>22</sup> bhikkhusaṃghaṃ parivisaḥi" ti.

それから世尊は比丘サンガに囲まれて鉢と衣とをもってチュンダの住処に行つて、用意された座に坐り、チュンダに「チュンダよ、汝が用意したスーカラマツダヴァは、それを私にだけ給仕しなさい。残りはそれを穴に埋めなさい。チュンダよ、私は、神々、マール、梵天を含む世界において、沙門婆羅門も含む人々の中で、その者が〔これを食べて〕、その食べられたものが正しく消化されるにいたる、そのような者を、如来を除いてほかに認めない。チュンダよ、しかし〔汝が〕用意したほかの硬食・軟食は、それを比丘サンガに給仕しなさい」と言った。

so: "sādhu bhante" ti tathā<sup>23</sup> akāsi. tato bhagavā bhuttāvasāne cundaṃ dhammiyā kathāya sandassetvā samādapetvā samuttejetvā sampahaṃsetvā uṭṭhāyāsānā yena cundassa ambavanaṃ tena gantvā tattha bhikkhusaṃghena saddhiṃ nisīdi. bhagavati tasmim divase cundassa bhattaṃ bhutte kharo ābādho uppajji. lohitāni pakkhandiṃsu, bālḥā vedanā<sup>24</sup> pavattati.

彼(チュンダ)は「かしこまりました」と〔言つて〕そのとおりに行つた。それから世尊は食後にチュンダを説法によって教示し、訓戒し、励まし、喜ばせ、座から立つてチュンダのアンバ林に行き、そこで比丘サンガとともに坐つた。世尊がその日、チュンダの施食を食した時に、はげしい病が生じた。血が飛び散つた。はげしい〔苦〕受が起こつた。

atha kho bhagavā ānandaṃ āmantesi: "āyāṃ' ānanda yena kusiṇārā ten' upasaṅkamissāmā" ti. therō: "sādhu bhante" ti bhagavato vacanaṃ paṭisuṇi. atha kho bhagavā samādhiveḷumissakena<sup>25</sup>

<sup>19</sup> 異読(C)は sassabrāhmaṇiyā とするが補う。

<sup>20</sup> pan'. 底本に欠。異読(C)によって補う。

<sup>21</sup> aññaṃ. 底本は aññaṃ cunda. 異読(C)によって cunda を削除する。

<sup>22</sup> paṭiyattaṃ tena. 底本に欠。異読(C)によって補う。

<sup>23</sup> tathā. 底本に欠。異読(C)によって補う。

<sup>24</sup> bālḥā vedanā. 底本は bālḥavedanā. 異読(H)に従う。

kāyasakaṭaṃ \*veṭhetvā<sup>26</sup> pāvānagarato mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ nikkhamitvā maggaṃ paṭipajji.

それから世尊は阿難に「阿難よ、クシナーラーに赴こう」と呼びかけた。〔阿難〕長老は「尊師よ、かしこまりました」と言って世尊の言葉に同意した。それから世尊は三昧という竹紐で身体という車を巻いて〔修繕し〕、パーヴァーナガラから大比丘衆とともに出発して道を進んだ。

evaṃ bhagavā maggaṃ paṭipajjanto pipāsaparipīlito maggā okkamma aññatarasmiṃ rukkhamūle nisīdi. ānandaṃ āmantetvā sabbesaṃ sattānaṃ \*saṃvegakaraṃ vācaṃ bhāsanto<sup>27</sup>: “\*iṅgha<sup>28</sup> me tvaṃ ānanda udakaṃ āhara(.) pipāsito 'smi(.) ānanda [244] pivissāmi” ti \*āha.

このように世尊は道を進みつつ、渇きに悩まされ、道からそれである樹下に坐って「さあ阿難よ」と阿難に呼びかけて、一切衆生に厭離心を生じさせる言葉を語りつつ「さあ、阿難よ、私に汝は水を持って来なさい。私は渇いている。阿難よ、私は〔水を〕飲みたいのだ」と言った。

“dhīratthu<sup>29</sup> vata bho saṃsāravāso(.) ayaṃ hi kira bhagavato pubbe ekapacchābhattena aṭṭhārasayojanamaggaṃ gacchantassa pipāsito vā kāyadaratho vā na kadāci jāto(.) atha ca pan' etarahi tigāvutaṃ gacchantass' eva pipāsito kāyadaratho jāto(.) kuhiṃ nārāyanabalaṃ(.) tathāgatassa hi balaṃ hatthigaṇanāya hatthīnaṃ koṭisahassānaṃ balaṃ purisagaṇanāya dasannaṃ purisakoṭisahassānaṃ balaṃ(.) sabbānaṃ taṃ evarūpaṃ balaṃ cundassa bhattabhuñjanakālato paṭṭhāya paṅkavāre

<sup>25</sup> samādhiveḷumissakena. 底本は samādhiveḷumissakena viya. 異読 (C) によって viya を削除する。

<sup>26</sup> veṭhetvā. 底本は vedhetvā. 異読の支持はない。

<sup>27</sup> \*saṃvegakaraṃ vācaṃ bhāsanto. 底本は saṃvegakaraṇabhāsaṃ bhāsanto. 異読 (C) savegakaraṇaṃ vācaṃ bhāsanto と異読 (Po) saṃvegakarabhāsaṃ bhāsanto と DN 註 (vol. II, p. 573) etam atthaṃ dassento viya sabbalokassa saṃvegakaraṃ vācaṃ bhāsanto を参考にして訂正する。

<sup>28</sup> \*iṅgha. 底本は iṅgha. 異読の支持はないが訂正する。

<sup>29</sup> 底本は dhīratthu の前に aho を置く。しかしこの aho は \*āha として前文につなげるべきである。



pakkhita-udakaṃ viya parikkhayaṃ gataṃ(.) evaṃ rogo sabban taṃ  
 ārogyaṃ maddamāno āgacchati(.) tasmā alam eva sabbasaṃkhāre  
 nibbindituṃ alaṃ virajjituṃ alaṃ vimuñcituṃ” ti.

——<sup>30</sup>ああ、厭わしい！ 輪廻にあることは。なぜなら世尊は以前に

<sup>30</sup> 以下の文は阿難のセリフではない。編纂者の挿入句であろう。この記事は Udāna 註の次の記事によっているものと思われる。しかしこれは涅槃經の文脈で言うと、ここより少し後の箇所、カクッター（クックタ）川に到着して水浴して、水を飲み、流れを渡ってアンパ林に入った釈尊が、チュンダカ長老（チュンダ鍛冶工師子とは別人）に「私は疲れている。私は横になりたい」と語る箇所への註釈である。

Udāna 註 (p. 403)

kilanto 'smi cundaka, nipajjissāmi ti tathāgatassa hi -

“kāḷāvakaṇ ca gaṅgeyyaṃ, paṇḍaraṃ tamba-piṅgalaṃ;

gandha-maṅgala-hemaṇ ca, uposatha-chaddant' ime dasā” ti. —

evaṃ vuttesu dasasu hatthikulesu kāḷāvakasaṅkhātānaṃ yaṃ dasannaṃ  
 pakatihatthīnaṃ balaṃ, taṃ ekassa gaṅgeyyassā ti evaṃ dasaguṇitāya gaṇānāya  
 pakatihatthīnaṃ koṭisahassabalappamāṇaṃ sarīrabalaṃ. taṃ sabbam pi tasmim  
 divase pacchābhattato paṭṭhāya caṅgavāre pakkhitta-udakaṃ viya parikkhayaṃ  
 gataṃ. pāvāya tigāvute kusināra. etasmim antare pañcaviṣatiyā ṭhānesu nisiditvā  
 mahantaṃ ussāhaṃ katvā āgacchanto sūriyatthaṅgamanavelāya bhagavā  
 kusināraṃ pāpuṇī ti evaṃ “rogo nāma sabbam ārogyaṃ maddanto āgacchati” ti  
 imam atthaṃ dassento sadevakassa lokassa saṃvegakaraṃ vācaṃ bhāsanto “kilanto  
 'smi, cundaka, nipajjissāmi” ti Aha.

「チュンダカよ、私は疲れている。私は横になりたい」と。なぜなら「カーラーヴァカ、ガングェヤ、パンダラ、タンバ、ピンガラ、ガンダ、マンガラ、ヘーマ、ウポーサタ、六牙、これらが10である」とこのように言われる10の象の血統がある中、カーラーヴァカと呼ばれる普通の象の10頭の力がガングェヤ象1頭の力であるという仕方では10倍していく計算で〔ガングェヤ象10頭の力はパンダラ象1頭の力……ウポーサタ象10頭の力は六牙象1頭の力であり、六牙象10頭の力が如来1人の力であるので〕如来には普通の象の百億頭の身力がある〔人で言えば一千億人力になる〕。その力がすべてその日に食事の以降、こし器に注がれた水のように減じた。パーヴァーから3ガーヴァタのところにはクシナーラーがある。この間に25箇所ですり、大きな努力をしてやってきて、日没時に世尊はクシナーラーに到着した。とこのように「病とは健康をすべてそこないながらやってくる」ということを示すために、神々を含む世界に厭離心を生じさせる言葉を語りつつ「チュンダカよ、私は疲れている。私は横になりたい」と言った。

浪花宣明『サーラサンガハの研究』平楽寺書店、1998年、p. 36参照。

は、一食後に<sup>31</sup>、18由旬の道を進んでも、渴きも身体の疲れも決して生じなかったと伝え聞く。しかるに今や、3 ガーヴタを進んだだけで、渴きと身体の疲れが生じた。ナーラーヤナの力（那羅延力）はどこに失せてしまったのか。なぜなら如来の力は象の数でいえば、百億頭の象の力に、人の数でいえば、一千億人の力に匹敵する。このようなその力がすべてチュンダの施食を食べた以後、泥の壺に注がれた水のように減じた。このように病はその健康を完全にそこないながらやってくる。それゆえ一切行を厭い、離貪し、脱するのがよい――

athāyasmā ānando bhagavantam etad avoca: “idāni<sup>32</sup> bhante pañcasatamattāni sakaṭāni<sup>33</sup> atikkantāni(.) tañ ca pana bhante udakaṃ cakkacchinnaṃ parittaṃ luḷitaṃ sandati(.) ayañ ca bhante kukkuṭānadi<sup>34</sup> avidūre acchodakā sātodakā sītodakā setodakā \*supatitthā<sup>35</sup> rammanīyā(.) tattha<sup>36</sup> pāṇiyaṃ pivatu(.) gattāni ca sītaṃ karotū” ti.

その時、阿難は世尊に「尊師よ、今しがた500台の車が通り過ぎました。尊師よ、それでその〔川の〕水は、車輪に割かれ、少なく、かき乱されて流れています。尊師よ、この近くのクックタ川<sup>37</sup>は、水が、澄んでいて、気持ちがよく、冷たくて、白く、川岸にまであふれる、美しい川です。そこで水をお飲みになつてください。そして四肢をお冷しくください」

<sup>31</sup> 「一食後に」(ekapacchābhattena) とは食後（午前中まで）からその日の日没までの時間帯のことであるらしい。cf. MN 註 (vol. V, p. 46) …… *ekapacchābhatten'* eva pañcacattāliya yojanāni atikkamma sūriyatthaṅgamanavelāya (-atthaṅgamaḷivelāya とあるが訂正して読む) kulaputte pavīṭṭamatte yeva taṃ kumbhakārasālaṃ pāpuṇi 「〔世尊は〕一食後だけで45由旬を踏破し、日没時に、良家の息子（ブクサーティ）が〔陶工の家に〕入ると同時に、その陶工の堂に到着した」。

<sup>32</sup> idāni. 底本は idāni pana. 異読 (C) によって pana を削除する。

<sup>33</sup> pañcasatamattāni sakaṭāni. 底本は pañcasattamāni sakaṭāni. 異読 (C<sub>1</sub>) に従う。

<sup>34</sup> \*kakuṭṭhā nadi.

<sup>35</sup> \*supatitthā. 底本は supatitthā. 異読の支持はない。

<sup>36</sup> \*tattha. 底本は tatthā. 異読の支持はない。誤植であろうか。

<sup>37</sup> クックタ (kukkuṭa) 川の綴りであるが、*Paṭhamasombodhi* の異読には (C<sub>1</sub>) kukuṭa、(P<sub>0</sub>) kukkuṭṭha がある。他に kakuṭṭhā, kakutthā, kukuṭṭhā, kakudhā kakuthā が知られている。

と言った。

dutiyam pi tatiyam pi bhagavā ānandam etad avoca: “iñgha me tvam ānanda pāṇiyaṃ āhara(.) pipāsito 'smi(.) ānanda pivissāmī” ti. tato thero bhagavato pattaṃ ādāya yena sā nadī ten' upasaṅkami. atha sā [245] nadī cakkacchinnā parittā luḷitā<sup>38</sup> sandamānā pi there upasaṅkamante<sup>39</sup> acchā vipprasannā anāvilā sandati. taṃ disvā thero cintesi: ‘aho acchariyaṃ vata bho aho \*abbhutaṃ<sup>40</sup> vata bho mahānubhāvo<sup>41</sup> bhagavā’ ti(.)

二度も三度も世尊は阿難に「さあ、阿難よ、私に汝は水を持って来なさい。私は渴いている。阿難よ、私は〔水を〕飲みたいのだ」と言った。それから〔阿難〕長老は世尊の鉢をもってその川に近づいた。するとその川は車輪に割かれ、少なく、かき乱されて流れていたけれども、長老が近づいて行くと、澄んで、清らかに、濁りなく流れた。それを見て長老は「ああ、なんと不思議なことか。ああ、なんと稀有なことか。世尊は大威力をお持ちだ」と考えた。

‘yatra hi nāma ayaṃ sā nadī cakkacchinnā parittā luḷitā sandamānā pi mayi upasaṅkamante acchā vipprasannā anāvilā sandati’ ti cintetvā pattena udakaṃ gahetvā yena bhagavā ten' upasaṅkamtivā upanāmesi: “pivatu bhante bhagavā pivatu sugato pāṇiyaṃ” ti. atha kho bhagavā pāṇiyaṃ pivitvā ānandam etad avoca: “āyāmi' ānanda yena kukkuṭānadi tena gamissāmā” ti.

〔つづけて〕「なぜならまさにこの川は車輪に割かれ、少なく、かき乱されて流れていたはずであるのに、私が近づいて行くと、澄んで、清らかに、濁りなく流れているのであるから」と考えて、鉢に水を汲んで世尊に近づいて「尊師よ、世尊はお飲み下さい。善逝は水をお飲み下さい」と〔言って〕水を与えた。それから世尊は水を飲み、阿難に「阿難よ、クックタ川に行こう」と言った。

<sup>38</sup> luḷitā. 底本は lūḷitā. 異読 (C C<sub>1</sub> P<sub>0</sub>) lulitā, (H) lullitā を参考にして訂正する。

<sup>39</sup> upasaṅkamante. 底本は upasaṅkamite. 異読 (C) に従う。

<sup>40</sup> \*abbhutaṃ. 底本は abbhūtaṃ. 異読の支持はない。

<sup>41</sup> mahānubhāvo. 底本は ānubhāvo. 異読 (C) に従う。